



修学旅行 4 「あっ」



東大寺から清水寺に向かうバスの中は静寂に包まれていた。わずかに聞こえてくるのは、バスのタイヤと地面が爆ぜる音、そして時折誰かが寝返りを打つのであろう衣擦れのような摩擦音のみ。

子ども達は寝入っていた。

駐車場から清水寺に向かう参道には、両側にお土産店が行列のように軒を連ね、先ほどまで眠っていた子ども達のテンションを地下100メートルから東京タワーのてっぺんまで一気に押し上げたように感じた。いや、いや、しかし、これは少し配慮に欠けるというものであろう。なにせ、ここは京都である。“東京タワー”はちょっとね。「地下100メートルから“京都タワー”のてっぺんまで押し上げた。」とを感じるのが、良識ある大人としての正しい感じ方なので

はなかろうかと自省しつつ、油断すると誰かにぶつかりそうな人いきれの中、参道の先まで続く人混みを縫うように境内に向かった。

清水の舞台で記念撮影をし、坂を下って音羽の滝に来ると、その水をひしゃくで汲んで飲もうと大勢の人たちが列をつくっていた。糸を引くように静かに流れ落ちる3本の水線には、それぞれ「学業」「健康」「恋愛」の3つの御利益があるとされている。余りに人が多くスケジュールに影響が出そうなので、隣にいたK達くんに「先生のぶんも健康をお願いしといてくれるかな。」と、お願いのお願いをすると快く引き受けてくれた。K達くんは心優しき人なのである。

子ども達が列の最後尾に並んで15分も待ただろうか、やっと滝に辿り着いた。ちょっと神妙な顔つきで流れ落ちる滝に向かって厳かにひしゃくを差し出し、御利益を享受すべく心静かにしめやかに手のひらに水を受け、そして流れ



るような動作でその手を口元に運んだりするようなことはなく、まあ、わりとあっさり子ども達は水を汲み、飲んでいるように見えた。

滝から戻ってくる子ども達に、「何を願ったの？」と尋ねてみる。

「ぼくは、健康です。」

「わたしは、学業をお願いしました。」

「わたしは、え〜と、・・・・・・」

うん、うん、そりゃあ、聞いたこっちが野暮でした。

そのちょっとした気まずい間を埋めて空気を変えようとするかのように、K 達くんが絶妙なタイミングで明るい声を響かせた。

「ぼくは、健康を頼みました。」

と、そう言った瞬間、何かを思い出したように小さく「あっ」と声を漏らした。そして、こちらに向けられた顔には、なんとも申し訳なさそうな表情が浮かんだ。

K 達くんは心優しき人であり、そして、また責任感の強い人でもあった。

K 達くん、大丈夫です。大晦日に家族でお寺にお参りしたときに、お賽銭を奮発してしっかりお願いしといたから。

本日の宿泊ホテルへは、清水寺の駐車場に駐めてあるバスから荷物を持って徒歩で移動した。

Y 衣さんの華奢な肩には、いっばいに膨れ上がったボストンバッグがまるで意地悪をするかのようにずしりと垂れ下がっていた。ときおり肩に掛ける位置をずらしたり、両手でバッグの持ち手を持って肩への負担を減らしたりしながら、弱音をはくこともなく黙々と歩く姿はなんともけなげである。

そう言えばバスの中でこんな会話をした。

「おみやげをいっばい買って帰るの？」

「お父さんやお母さんは、『家族へのお土産は買ってこなくてもいいよ。自分のお土産をしっかり買ってきなさい。』と言うんです。でも、わたしは家族へのお土産を買いたいんです。」

——— いっばい思いのこもったお土産が、Y 衣さんのバッグをいっばい膨らませているのでした。